

# 近づけ・軽んじ・遠ざける、呼称「ちゃん」の考察 — ジェンダーとパワーの観点から —

濱野 綾<sup>†</sup>

Approach, Belittle, Distance: An Analysis of the Address Term *-chan* in Relation to Gender and Power

Aya Hamano

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

人の名に付けて敬意を表す接尾語に、「さま」「さん」「ちゃん」「くん」などがある。「ちゃん」は人名の他に、「お父ちゃん」「お姉ちゃん」のように親族名称につけて用いられ、一般的に親しみを伝える呼称と認識されている。辞書などにも、親しい間柄、うちわの相手に親しみを込めて呼ぶ時に用いるなどと記述されている。一方、女性は、親しみを伝えるはずの「ちゃん」を男性から用いられるとき違和感を持つことがある。インターネット上でも、その理由を知りたいと思う人による投稿が少なからず見られる。筆者自身も同様の経験があり、それがこの研究の背景となっている。

### 1.2 研究目的と研究課題

こうした背景から、「ちゃん」には軽卑的な用法や意味合いがある可能性が考えられた。濱野（2021）では、社会人女性5名を対象にインタビュー調査を行い、「ちゃん」が女性同士では人間関係の距離感を反映し、遠近だけでなく、あいまいな距離感でも用いることができること、また、女性が男性から呼ばれると、庇護的にも軽卑的にも受け止めうることを示した。男女で異なる感情や意識がある可能性が示唆されたため、呼ぶ側の男性を対象に調査を行うとともに、呼ばれる女性についても濱野（2021）の調査データから再分析を行う。

本論では、男性が女性を呼ぶ「名+ちゃん」（以降〈名ちゃん〉）という呼称において、呼ぶ側の男性と呼ばれる側の女性それぞれが持つ感情や意識の非対称性を明らかにする。さらに、この呼称が女性に与える影響を検討し、〈名ちゃん〉が持つ意味特徴を明らかにすることを目的とする。

### 1.3 音声から見る「ちゃん」

「ちゃん」は「さん」の「さ」が「ちゃ」に語形変化（硬口蓋破擦音化）し派生した（杉本, 2005: 307-308）。白勢（2019: 88-89）によると、子音の出現順は、「ちゃ」の子音[te]の方が、「さ」の子音[s]より早い。[s]が発音できない時期に「3歳」が「ちゃんちやい」と発音されると、子どもっぽくかわいらしい響きとなる。このことは「ちゃん」が含み持つ意味合いに影響する。『NHKことばのハンドブック第2版』（NHK放送文化研究所編, 2005: 68, 129-130）には、学齢前の幼児と、小学生にも「本人が痛ましい事件に巻き込まれた場合」や「愛らしさを特に強調したい場合」に「ちゃん」を使用してよいと記述されており、「ちゃん」がかわいい子ども向けの呼称であり、かつ“弱い”という意味合いも含まれる呼称であることが示唆される。

金水（2023: 109）は、元来幼児語であった「ちゃん」が、大人の女性にも使用されることについて、「女性にとって『幼い』という特性が『かわいい』という評価とつながって、よいこととして受け入れられやすい通念が存在すること」と関連づけ述べている。入戸野（2009: 19-30）は、「かわいい」について、「幼児に対する愛情から派生して」「保護したいというポジティブな感情を喚起させる対象をさす形容詞である」と定義している。これらから、“自分より下”かつ“自分より弱い”とみなす対象が「かわいい」であるといえる。「ちゃん」が「さん」からの音変化であることは、「ちゃん」が、呼ぶ側よりより劣っており、それゆえ半人前であるといった意味合いと、呼ぶ側のパワー、呼ばれる側の被支配を含み持つ基盤になると考えられる。

## 2. 先行研究・辞書・報告書からの論点整理

### 2.1 呼称と人間関係

人を呼ぶ際には相手との人間関係や心理的な距離感が反

<sup>†</sup>2023年度修了（人文学プログラム）

映された呼称が選択される。(滝浦, 2008: 79; 滝浦, 2013: 84-85)。また、人を呼ぶことは文化人類学的にセンシティブな意味合いを持つ(穂積陳重・穂積重行, 1992: 105; 滝浦, 2008: 79)ため、直称を避け、敬避的・遠隔的に、呼ばないように呼ぶことが為される(滝浦, 2005: 110; 滝浦, 2008: 78)。

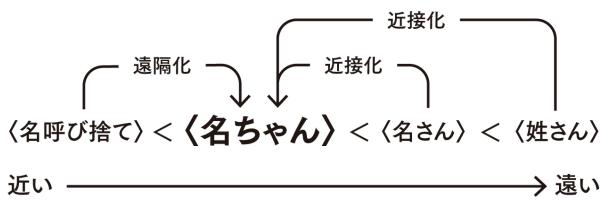
穂積陳重(1919: 103)が「近きは賤しく、遠きは貴し」と表したように、相手との距離を置く場合は敬避的な敬称、親しい相手に近づける場合は親称、あるいは距離に反して近づける場合は蔑称となる(穂積陳重・穂積重行, 1992: 121; 滝浦, 2008: 78-79)。親しい関係では、相手に直に触れるように呼んでも人間関係が損なわれないため、共感的・近接的な呼称となるが、力の差が大きい場合には権力性を帯び軽卑的に響く(滝浦, 2008: 78-79)。また、日本語の呼称では、目上と目下という対立概念が基本となっており(鈴木, 1973: 149)、目上には代名詞や名で呼ぶことはできず、名で呼べるのは相手が対等か目下のときである(滝浦, 2008: 80-81)。名で呼ぶことは相手を“上に見ない”という意味を含み持つといえる。

## 2.2 「ちゃん」の距離感

本論では、名(省略形を含む)に「ちゃん」をつける呼称を〈名ちゃん〉、名に接尾辞をつけない呼称を〈名呼び捨て〉、名に「さん」をつける呼称を〈名さん〉のように記述する。

〈名ちゃん〉は、他の呼称と同様に人間関係の距離感を反映した相対的な距離感を表す。〈名呼び捨て〉より接尾語がつく分だけ遠く、〈名さん〉より「ちゃん」と「さん」との距離の差分だけ近い。〈姓さん〉と比べる場合は、「ちゃん」と「さん」との差分に加え、「名」と「姓」の差分が重なり、さらに近い呼称となる(滝浦, 2008: 83)(図1)。

図1 〈名ちゃん〉の距離感



## 2.3 接尾辞

「さん」「ちゃん」「くん」の意味用法を辞書の記述から整理する。辞書は、『日本国語大辞典 第二版』、『デジタル大辞泉 第二版』、『大辞林 第四版』、『三省堂国語辞典 第七版』、『新明解国語辞典 第八版』の5書を参照した。

### 2.3.1 「さん」

人名、人を表す語、職名などの後につけて敬意を表す。『これからの敬語』(国語審議会, 1954)は「標準の形」とした。福田(2013:182)は、「さん」は「さま」より「社

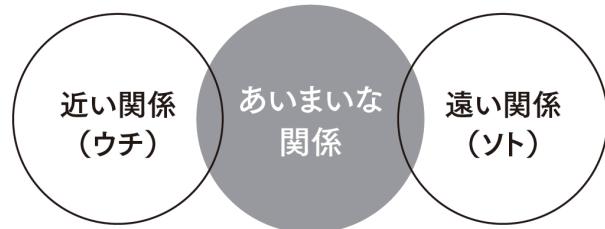
会的役割関係の表示とは無関係」でくだけた呼称であると指摘している。他方、辻村(1970: 95)は、「さん」だけでは人間関係を表せず、「氏」や「翁・女史・くん・ちゃん」などが用いられていると指摘した。年齢(上下関係)、男女(ジェンダー)を示さずにコミュニケーションを図ることは困難であることが示唆される。

### 2.3.2 「ちゃん」

「さん」よりくだけた表現で、人名、人を表す語などの後につけて親しみの意を表す。参照した辞書では、敬意、上下関係、ジェンダーについては触れられていない。また、「ちゃん」には女子・女性同士の用法や下の女性に対する男性の用法、女性の自称詞としての用法などもあるが、いずれの辞書にも記述が見られない。

三島(2003)は、小学生の女子同士では、「ちゃん付け」が最も多く、一緒に遊ぶ友だち同士内からも、一緒に遊ばない同級生からも呼ばれうると指摘している。劉(2016)は、大学生の同級生女子同士では、親しい場合は「愛称・あだ名」の次に「名ちゃん」「名だけ」が多く、親しくない場合は「名ちゃん」が最も多いと述べている。宮城・黒木(2018)は、大学生の同級生女子同士では、初対面時や相手に「あだ名」がない場合は、「ちゃん」が最も多く使われることを明らかにしている。和田・伊藤(2018)は、大学生の女子同士では、「ちゃん」は、呼ばれた感情、呼ぶ人への感情において、ポジティブ感情もネガティブ感情も低く、呼ぶ人との親密さの認知も低いことを明らかにしている。濱野(2021)は、女子・女性同士では、ウチ・ソトだけでなく、あいまいな関係でも用いることができ、近づきすぎず、よそよそしくもない、程よい距離感、あるいはあいまいな距離感を表すと述べている(図2)。先行研究からは、「ちゃん」は、女性同士では互いの関係性によらず用いることができ、辞書の記述などよりも“遠い”呼称であることが示唆される。

図2 女子同士の〈名ちゃん〉の使用範囲



神谷(2021)によると、「ちゃん」は「いい子ちゃん」「可愛子ちゃん」など外見や性質を表す肯定的な語にも付き、侮蔑や揶揄の意味で用いられる。また、上の男性から呼ばれると庇護的にも軽卑的にも受け止められうる(濱野, 2021)。これらの指摘から、「ちゃん」には軽卑的あるいはジェンダーとかかわる用法があり、“女”や“子ども”、“庇護の対象”であることが立ち現れる呼称であることが示唆される。

### 2.3.3 「くん」

同輩やそれ以下の人の名前について、親しみと軽い敬意を表す。成田（2013）は、「くん」は「典型的には男性を対象と」し、「さん」「ちゃん」と使いわけられている可能性を指摘している。山下（2017: 100-107）によると、学齢前の男子にも「くん」が使われ「ちゃん」は使われない傾向にある。男子・男性に「くん」が使用される文脈では、「ちゃん」で示される対象が女子・女性あるいは“幼い”ことの指標になると考えられる。

### 2.4 呼称とジェンダー

呼称は他の呼称と使い分けられる場合にジェンダーの指標になることがある。男性を「くん」、女性を「さん」で呼び分ける場合、標準形（無標）の「さん」も女性を指示することとなり有標となる。佐竹（2005）によると、「女一さん／男一くん」という使い分けは、性別を明確に表示する一般的なジェンダー規範に合致している。

相手を姓で呼ぶか名で呼ぶかという呼称選択にもジェンダーがかかわる。斎藤（2010: 189）は「男性は『姓』、女性は『名』で表記される男女非対称もある」と述べている。また、女性を名で呼ぶことは「男女の社会的な階層差を背景にした権力（地位）の誇示」であり（上野・メディアの中の性差別を考える会, 1996: 46）、一方が権力を持っており、女の従属性を可視化している（Spender, 1987: 44）との指摘も見られる。

職場では、劉（2017）によると、親しくない同輩・部下に対しては「姓+さん」で呼ぶことが一般的であり、男性は女性を「姓+さん」で呼ぶことが最も多いが、女性の同輩・部下に対しては多種多様な呼称が使用される。小林（1997: 130-131）によると、男性は女性に対して役職名以外では「[名字] さん」を用いている。女性同士ではさまざまな呼称が用いられるのに対し、男性は「名」や「あだ名」で呼ばれることも「ちゃん」をつけて呼ばれることもない。一方、国立国語研究所（1982: 305-337）は、男性の下位者には「姓クン」、姓の呼びすてが用いられ、女性事務員には「姓サン」、名の一部に「ちゃん」をつけた形を含む愛称が用いられていると表した。人事院（2018）は、セクシュアル・ハラスメントの事例として、部署のトップが下の女性職員に対して「呼び捨て」や「〇〇ちゃん」などの愛称で呼ぶ事例を挙げている。

呼称選択には上下関係が関与し、男女で非対称が見られる。これらから〈名ちゃん〉は、下位者に対するパワーの行使、あるいは性的な意味合いを含み持つ可能性が示唆される。

## 3. 調査

### 3.1 調査の目的

男性による女性への〈名ちゃん〉の使用実態とその動機を聞き取ること、女性が男性から〈名ちゃん〉と呼ばれる

際の受け止め方や感情を明らかにし、男女の意識の非対称性を検討する。

### 3.2 調査方法

質問内容を事前に準備しつつ状況に応じて柔軟に変更する「半構造化インタビュー」（大谷, 2019: 140；太田, 2019: 88）と、「インタビューが相互行為を通したアクティヴなもの」としてインタビュアーとインタビュイーが「共同で知識を構築」する「アクティヴ・インタビュー」（Holstein & Gubrium, 1995/2004: 10, 21）を組み合わせた、いわば「半構造化アクティヴ・インタビュー」とでも呼べる手法を採用した。筆者がインタビュアーとして典型的なジェンダー観や社会規範を投げかけ、ときには共感を示すなど、能動的に参与することでインタビュイーが自身の経験に基づく〈名ちゃん〉の“意味”を語る、あるいは語らないといった、やまだ（2006）が指摘するような対話的でアクティブな相互行為を通じた共同生成的な場を構築しながら進めた。

### 3.3 調査対象者と実施時期

#### 3.3.1 男性への調査

関西圏に住む44歳から73歳、平均年齢53.4歳の男性5名を対象に、2022年7月～2023年1月にかけて、女性を呼ぶ呼称〈名ちゃん〉にフォーカスし、個別に音声電話でインタビュー調査を実施した。調査参加者は、鎌元剣士（53歳、会社員）、上田光敏（53歳、会社員次長）、神谷寿之（44歳、語学スクール経営）、山本直人（44歳、学校職員）、道岡尚紀（73歳、NPO法人代表）（すべて仮名）。

#### 3.3.2 女性への調査

濱野（2021）のデータを利用した。関西圏に住む22歳から38歳、平均年齢32.6歳の女性5名を対象に、2021年4月～9月にかけて、学齢前からインタビュー時までの呼称歴の調査を実施した。調査参加者は、土井結花（35歳、教育機関職員）、森聰美（33歳、ヨガインストラクター）、小川由梨（38歳、イベントコンパニオン）、中原理乃（22歳、販売員）、若野恵美（35歳、会社員）（すべて仮名）。本論では年齢・立場が上の男性から呼ばれる〈名ちゃん〉を分析対象とする。

### 3.4 倫理的配慮

すべての調査参加者に回答は任意であること、中断の権利、匿名性とプライバシーの厳守について伝え、本研究での使用の承諾を得た。個人が特定される可能性のある情報はすべて改変した。ただし、女性の氏名についてはモーラ数や音感が呼び方に影響するため、それらの特徴を損なわないよう留意した。

## 4. 分析方法

### 4.1 分析の手法

インタビューの逐語録（質的データ）をマトリックス法

を用いて分析した。マトリックス法とは、質的データを表形式で整理し行と列の二方向から分析することでデータに潜んだ意味を可視化する手法である（大谷、2019: 182；佐藤、2008: 70-71）。逐語録から語用論的観点を含む観点を8つ抽出した（4.2参照）。観点ごとにマトリックスを作成し、その観点があるかないかの二項対立で分析した。横軸に人間関係の親疎（〔親〕／〔疎〕）と二項対立（〔+〕／〔-〕）、縦軸に上下関係（〔↑〕：上の相手／〔→↓〕：同じまたは下の相手）を取り、個人別の個別マトリックスと全体の集計マトリックスを作成した（表1）。

表1 マトリックスの例

親		孫						f		親		孫					
		自/使用		自/不使用		他/使用				m		m/使用		近		遠	
		近	遠	近	遠	近	遠			近	遠	近	遠	近		遠	
鎌元																	
上田										●							
神谷	↑		●					↑		●							
山本																	
道岡																	
鎌元		●															
上田			●	●	●												
神谷	↓		●					↓		●							
山本																	
道岡		●	●	●	●			↓		●							
鎌元																	
上田																	
神谷																	
山本																	
道岡																	
近		遠		近		遠		近		遠		近		遠		近	
m		↑	0	0	1	0	0	0	↑	0	0	2	0	0	0	f	→ 0 2 1 1
		↓	5	2	2	1	0	0	↓	3	4	3	0	5	0	f	↓ 2 0 3 3

## 4.2 分析に用いる観点

逐語録から抽出した、遠近、敬意、軽卑的といった語用論的観点を含む8つの観点を用いた。①遠近：近接化 [近]／遠隔化 [遠]、②敬意：失礼 [失]／丁寧 [丁]、③軽卑的：軽卑的 [+]／非軽卑的 [-]、④権力：権力的 [+]／非権力的 [-]、⑤親しみの表明：表明 [+]／表明しない [-]、⑥好意：ある [+]／ない [-]、⑦女性の違和感：認識 [+]／非認識 [-]、⑧〈名ちゃん〉と呼ぶ行為：否定的 [否]／肯定的 [肯]。①から⑤は男女に共通して見られ、⑥から⑧は男性にのみ見られた。調査参加者ごとに各観点への言及の有無を確認した。[近] [遠]、[+] [-] などの [ ] 表記はマトリックスで用いる。

## 5. 橫斷的分析

観点ごとに分析した結果から、主に男性の $[\rightarrow \downarrow]$ （立場・年齢が同等か下の女性へ呼びかける場合）、女性の $[\downarrow]$ （立場・年齢が上の男性から呼ばれる場合）の語りにフォーカスし、8つの観点を横断的に分析する。まず、本論の基本となる観点①「遠近」を起点とし、他の観点を重ね合わせ、自他で異なる男性の意識を見ていく。

## 5.1 自他で異なる男性たちの意識

〈名ちゃん〉使用について、男性たち自身は倫理的（丁寧／非軽卑的／非権力的／好意なし）に使用する意識だが、他人については非倫理的（失礼／軽卑的／権力的／好意なし）に使用する意識がある。

意あり）に使用すると述べ、8つの観点のほとんどにおいて自他で意識が異なる。

### 5.1.1 觀點①「遠近」

男性自身は [→↓] の女性に対し, 「親」(親しいと認識する相手)でも, 「疎」(親しくないと認識する相手)でも〈名ちゃん〉を使用するが, 親疎によって遠近の意識が異なる。[親] で〈姓さん〉よりより近づけ([近]), [疎] で〈名呼び捨て〉よりより遠ざける意識([遠])を持つ傾向にある。少数だが[親]で[遠], [疎]で[近]の意識を持つ人も見られ, 矛盾しているように見える。しかし, 呼称は人間関係を反映した相手との距離感を伝える機能を有するため(滝浦, 2008: 79), 呼ぶ側がみなす相手との関係によっては遠近の向きが逆になることもあります(表2, 表3)。また, ほとんどの男性が他人は[疎]で〈名ちゃん〉を使用し相手を近づけていると語り, 自身の使用意識とは異なる。

表2 男性の〈名ちゃん〉使用における遠近の意識  
(m [自] [→↓])

〔親〕〔近接化〕		〔親〕〔遠隔化〕	
〈名ちゃん〉使用	〈名ちゃん〉不使用	〈名ちゃん〉使用	〈名ちゃん〉不使用
〈姓さん〉では遠すぎる 〈名さん〉では遠すぎる	〈名ちゃん〉では近すぎる ((名さん)を使用)	〈名呼び捨て〉では近すぎる ((名呼び捨て)を使用)	〈名ちゃん〉では遠すぎる ((名呼び捨て)を使用)
距離を置きたくない	近づいては失礼	近づいては失礼	距離を置きたくない
〔疎〕〔近接化〕		〔疎〕〔遠隔化〕	
〈名ちゃん〉使用	〈名ちゃん〉不使用	〈名ちゃん〉使用	〈名ちゃん〉不使用
〈姓さん〉では遠すぎる 〈名さん〉では遠すぎる	〈名ちゃん〉では近すぎる ((名さん)(姓さん)を使用)	〈名呼び捨て〉では近すぎる ((名ちゃん)は距離を保てる)	距離を置きたくない
距離を置きたくない	近づいては失礼	近づいては失礼	距離を置きたくない

表3 男性の〈名ちゃん〉使用における遠近の意識  
(m [他] [→↓])

〔親〕〔近接化〕		〔親〕〔遠隔化〕	
〈名ちゃん〉使用	〈名ちゃん〉不使用	〈名ちゃん〉使用	〈名ちゃん〉不使用
〈姓さん〉では遠すぎる 〈名さん〉では遠すぎる	〈名ちゃん〉では近すぎる 〈(名さん)を使用〉	〈名呼び捨て〉では近すぎる 〈(名さん)を使用〉	〈名ちゃん〉では遠すぎる 〈(名呼び捨て)を使用〉
距離を置きたくない	近づいては失礼	近づいては失礼	距離を置きたくない
〔疎〕〔近接化〕		〔疎〕〔遠隔化〕	
〈名ちゃん〉使用	〈名ちゃん〉不使用	〈名ちゃん〉使用	〈名ちゃん〉不使用
〈姓さん〉では遠すぎる 〈名さん〉では遠すぎる	〈名ちゃん〉では近すぎる 〈(名さん)・(姓さん)を使用〉	〈名呼び捨て〉では近すぎる 〈名ちゃん〉は距離を保てる	
距離を置きたくない	近づいては失礼	近づいては失礼	距離を置きたくない

### 5.1.2 観点①「遠近」×観点②「敬意」

自身は〔親〕〔近〕、〔疎〕〔遠〕のどちら相手にも敬意を示すが、〔疎〕の方が敬意を示す意識が強い。〈姓さん〉などの他の呼称が選択される場合には、〈名ちゃん〉では敬意を示せないとする意識が見られる。他人については、〔疎〕で近づけるように呼びかけており（〔疎〕〔近〕）、その行為が失礼であると述べている。

### 5.1.3 觀點①「遠近」×觀點③「輕卑的」

自身は「親」で相手を近づける意識だが軽んじる意識は

見られない。一方、他人は、[疎] で相手を近づけ軽んじていると述べている。

#### 5.1.4 観点①「遠近」×観点④「権力」

観点④「権力」についての言及は少ないが、意識の傾向は自他で対照的だ。自身は「親」で相手を近づける意識だが、権力を誇示する意識は見られない。他人については、[疎] で相手を近づけ、権力を誇示していると述べている。

#### 5.1.5 観点①「遠近」×観点⑤「親しみの表明」

自身は「親」で相手を近づける意識と同時に親しみを表す意識が見られ、[疎] でも親しみについての言及が見られる。他人については、「親」「疎」のいずれの場合も言及が見られない。

#### 5.1.6 観点①「遠近」×観点⑥「好意」

観点⑥「好意」、すなわち女性への性的な期待についての意識は、観点④「権力」についての意識の傾向と類似している。自身については、「親」で相手を近づける意識だが、好意的な意識は見られない。一方、他人については、[疎] で相手を近づけ、好意的な意識があると述べている。

#### 5.1.7 観点①「遠近」×観点⑦「女性の違和感」

自身については、「親」で相手を近づける意識だが、自身が呼びかけた女性は呼ばれたことに違和感を持っていないとの意識が見られる。[疎] では、相手と距離を置く意識だが、呼びかけた女性が違和感を持っているかどうかについてはどちらの意識も見られる。一方、他人が「疎」で近づけるように呼びかけた女性は違和感を持っていると述べている。

#### 5.1.8 観点①「遠近」×観点⑧「〈名ちゃん〉と呼ぶ行為」

「名ちゃん」と呼びかける行為について、調査参加者の男性5名全員が、「親」で肯定的、[疎] で否定的かつ非倫理的との意識が見られ、それため「名ちゃん」ではなく他の呼称を選択することも多く見られる。他人についても5名全員が「疎」で否定的な意識を持つ。観点⑧の「疎」では自他の意識が一致しているように見える。しかし観点①に照らすとそうではないことがわかる。自身は「疎」で相手に近づくことを是とせず近接化の「名ちゃん」の使用を避け、あるいは遠隔化の「名ちゃん」を使用し距離を保つ意識が見られる。一方、他人は「疎」であるにもかかわらず近接化の「名ちゃん」を使用していると述べている。距離を保つべき相手へは距離を置く意識で「名ちゃん」を使用し、近づかないよう他の呼称を選択する自己と、近づけるように呼びかける他者とでは意識が異なっている。

#### 5.1.9 観点③「軽卑的」×観点④「権力」×観点⑥「好意」

自身は「親」「疎」とも、軽卑的・権力的な意識も、好意的な意識（性的な期待）も見られないが、他人については一転し、軽卑的・権力的あるいは性的な意識を持つと述べている。

### 5.2 [↑] 上の女性に対する男性たちの意識

#### 5.2.1 観点①「遠近」×観点⑧「〈名ちゃん〉と呼ぶ行為」

上の女性には「名ちゃん」を使用しないだけでなく、強

いタブーの意識が見られる。

#### 5.2.2 観点①「遠近」×観点②「敬意」

「名ちゃん」が近接的で失礼であるため「親」の相手でも選択しないとする傾向が見られる。「名ちゃん」は男性にとって、親疎にかかわらず上の女性には使用できない下向きの呼称ということになる。男性が女性に「名ちゃん」を使用する際には、ヨコ方向（親疎／遠近）だけでなく、タテ方向（主に年齢の上下）にも意識が向けられているといえる。

### 5.3 女性たちの意識

女性の意識は相手との力関係に影響される。観点①「遠近」を起点に他の観点を重ね合わせて見ていく。

#### 5.3.1 観点①「遠近」×観点②「敬意」×観点③「軽卑的」

[→] では「親」「疎」とも、交際相手・交際前の相手から呼ばれる場合に「名呼び捨て」と対比させ、「名ちゃん」を距離を保つ敬称と捉え、軽卑的・権力的との意識は見られない。「親」「→」観点②「敬意」では、「失」（失礼）、「丁」（丁寧）が拮抗したが、この意識の差異には男女の呼称観が反映されている。交際相手に「名呼び捨て」で呼ばれたいと伝えているにもかかわらず“かわいい”という理由で「名ちゃん」と呼ばれると、自身の呼称観と合致せず失礼と受け取るが、“「名呼び捨て」が権力的である”という理由で「名ちゃん」と呼ばれると、自身と対等であろうとする相手の呼称観に対し、丁寧に扱われたと共に受け取ることになる。

[↓] では「姓さん」と対比させ、近接的な意識が強く見られる。「疎」「↓」では「近」「遠」が拮抗した。「疎」「↓」「遠」の男性から娘や妹のように庇護的に扱われていると認識する場合は、丁寧・非軽卑的と受け取り、権力の影響は見られないが、「疎」「↓」「近」の場合は、軽卑的あるいは権力的と受け取っている。呼ぶ男性との力関係が呼ばれる意識に影響する可能性が示された。

#### 5.3.2 「親疎」×観点④「権力」×観点⑤「親しみの表明」

「親」「↓」「近」の場合、互いが持つ“近い”という距離感に差異がなければ、相手からの親しみの表明を違和感なく受け取っている。「疎」「↓」「近」の場合も、互いが持つ“遠い”という距離感に差異がなく、男性の権力性を受け取らなければ、違和感を持たずに「親しみ」を受け取るケースが多い。一方、親しみと同時に、失礼、軽卑的あるいは権力的と受け取ることもある。相手の権力性が意識される場合には、「名ちゃん」が含み持つ親しみの意味が、かえって軽卑的な違和感につながることになると考えられる。

### 5.4 男女非対称な意識

「名ちゃん」に対する男女で非対称な意識について各観点を重ね合わせて見ていく（表4）。

表4 男女非対称な意識

		親	疎	f	親	疎
		自/使用 自/不使用 他/使用	自/使用 自/不使用 他/使用		自/使用 m/使用	
①遠近		近 遠 近 遠 近 遠	近 遠 近 遠 近 遠		近 遠 近 遠	
	m	↑ 0 0 1 0 0 0	↑ 0 0 2 0 0 0	f	→ 0 2 1 1	
		↓ 5 2 2 1 0 0	↓ 3 4 3 0 5 0		↓ 2 0 0 3 3	
		[近]不使用 倫理的	[疎]不使用 倫理的		[近]不使用 倫理的	[疎]不使用 倫理的
②敬意		失 丁 失 丁 失 丁	失 丁 失 丁 失 丁	f	→ 1 1 1 1	
	m	↑ 0 0 1 0 0 0	↑ 0 0 4 0 0 0		↓ 0 0 3 3	
		↓ 0 2 2 0 0 0	↓ 0 4 3 0 5 0		[丁]/失不使用 倫理的	[疎]/失不使用 倫理的
③軽卑的		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ + - + -	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 0 1 3 3	
		↓ 1 5 1 0 0 0	↓ 0 1 1 0 5 2		[非軽卑的] 倫理的	[軽卑的] 非倫理的
④権力		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ + - + -	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 0 0 2 0	
		↓ 0 2 0 0 0 0	↓ 0 1 1 0 2 1		[非権力的] 倫理的	[権力的] 非倫理的
⑤親しみの 表現		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ 0 0 + 0	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 2 0 4 0	
		↓ 5 0 0 0 0 0	↓ 1 1 1 0 0 0		[親しみ] 倫理的	[権力的] 底謙的
⑥好意		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ + - + -	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 0 0 0 0	
		↓ 0 3 0 0 0 0	↓ 0 1 0 1 4 0		[非好意的] 倫理的	[好意的] 非倫理的
⑦女性の 違和感		+ -	+ -	f	→ + -	
	m	↑ 0 0	↑ 0 0		↓ 0 0	
		↓ 0 3	↓ 2 2		[違和感なし] 倫理的	[違和感] 非倫理的
⑧(名ちゃん) と呼ぶ行為		否 背	否 背	f	→ + -	
	m	↑ 1 0	↑ 4 0		↓ 2 5	
		↓ 2 5	↓ 3 1		[肯定的] 倫理的	[否定的] 非倫理的
						[否定的] 非倫理的

#### 5.4.1 観点①「遠近」×観点④「権力」

「親」の場合、男性は $\rightarrow\downarrow$ で「近」かつ非権力的な意識が見られるが、女性は $\rightarrow\downarrow$ で「遠」と受け取り、相手の権力についての言及は見られない。

「疎」の場合、女性は $\downarrow$ で「近」かつ相手の権力性を受け取っている。一方、男性は $\rightarrow\downarrow$ で「遠」かつ非権力的な意識の傾向が見られた。男性が語る他人の男性は、「近」かつ権力的に女性に呼びかけていた。つまり男性は自身の「名ちゃん」使用においては「遠」かつ非権力的な意識だが、同時に「近」かつ権力的な側面も認識しているといえる。このことは、男性の呼称行為が、自身の意識によらず呼ばれた女性や第三者から近接的、権力的だみなされる可能性があるとことを示している。

女性は、呼ぶ側の男性の立場・年齢（同等か上）の差異に敏感であり、とりわけ上下関係が伴う場合には、「名ちゃん」を庇護的ないし権力的な意味合いを持つものとして受け止めていることが示唆され、男女の意識に非対称が見られる。

#### 5.4.2 観点①「遠近」×観点⑤「親しみの表現」

男性は「親」 $\rightarrow\downarrow$ で、「近」かつ親しみを伝える意識が見られる。女性も「親」 $\downarrow$ で親しみを受け取るが、「疎」 $\downarrow$ で親しみを受け取る人が多い。つまり男性は親しい関係で、女性は親しくない関係で親しみがより意識されており、ここにも男女の非対称がある。

#### 5.4.3 敬称、蔑称、親称

「名ちゃん」をどのような呼称と捉えているかについて

も、観点①「遠近」と他の観点を重ね合わせることで見えてくる。

#### (1) 観点①「遠近」×⑤「親しみの表現」

男女とも「親」 $\downarrow$ で、距離を近づける共感的な親称（滝浦, 2008: 76）として捉えている（表5）。

#### (2) 観点①「遠近」×②「敬意」×③「軽卑的」

男性自身は「親」「疎」 $\rightarrow\downarrow$ で距離を置く敬避的な敬称（滝浦, 2008: 76）と捉え、他人は「疎」 $\rightarrow\downarrow$ で距離を近づける軽卑的な蔑称として使用していると捉えられる。女性は、「疎」 $\downarrow$ で「近」なら蔑称、「遠」なら敬称として受け取っていると捉えられる（表6）。

表5 親称

		親	疎	f	親	疎
		自/使用 自/不使用 他/使用	自/使用 自/不使用 他/使用		自/使用 m/使用	
①遠近		近 遠 近 遠 近 遠	近 遠 近 遠 近 遠		近 遠 近 遠	
	m	↑ 0 0 1 0 0 0	↑ 0 0 2 0 0 0		↓ 0 2 1 1	
		↓ 5 2 2 1 0 0	↓ 3 4 3 0 5 0		↓ 2 0 3 3	
		[近]不使用 倫理的	[疎]不使用 倫理的		[近]不使用 倫理的	[疎]不使用 倫理的
⑤親しみの 表現		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ 0 0 + 0	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 2 0 4 0	
		↓ 5 0 0 0 0 0	↓ 1 1 1 0 0 0		[親しみ] 倫理的	[権力的] 底謙的
⑥好意		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ + - + -	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 0 0 0 0	
		↓ 0 3 0 0 0 0	↓ 0 1 0 1 4 0		[非好意的] 倫理的	[好意的] 非倫理的
⑦女性の 違和感		+ -	+ -	f	→ + -	
	m	↑ 0 0	↑ 0 0		↓ 0 0	
		↓ 0 3	↓ 2 2		[違和感なし] 倫理的	[違和感] 非倫理的
⑧(名ちゃん) と呼ぶ行為		否 背	否 背	f	→ + -	
	m	↑ 1 0	↑ 4 0		↓ 2 5	
		↓ 2 5	↓ 3 1		[肯定的] 倫理的	[否定的] 非倫理的
						[否定的] 非倫理的

表6 敬称、蔑称

		親	疎	f	親	疎
		自/使用 自/不使用 他/使用	自/使用 自/不使用 他/使用		自/使用 m/使用	
①遠近		近 遠 近 遠 近 遠	近 遠 近 遠 近 遠		近 遠 近 遠	
	m	↑ 0 0 1 0 0 0	↑ 0 0 2 0 0 0		↓ 0 2 1 1	
		↓ 5 2 2 1 0 0	↓ 3 4 3 0 5 0		↓ 2 0 3 3	
		[近]不使用 倫理的	[疎]不使用 倫理的		[近]不使用 倫理的	[疎]不使用 倫理的
②敬意		失 丁 失 丁 失 丁	失 丁 失 丁 失 丁	f	→ 1 1 1 1	
	m	↑ 0 0 1 0 0 0	↑ 0 0 4 0 0 0		↓ 0 0 3 3	
		↓ 0 2 2 0 0 0	↓ 0 4 3 0 5 0		[丁]/失不使用 倫理的	[疎]/失不使用 倫理的
③軽卑的		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ + - + -	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 0 1 3 3	
		↓ 1 5 1 0 0 0	↓ 0 1 1 0 5 2		[非軽卑的] 倫理的	[軽卑的] 非倫理的
④権力		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ + - + -	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 0 0 2 0	
		↓ 0 2 0 0 0 0	↓ 0 1 1 0 2 1		[非権力的] 倫理的	[権力的] 非倫理的
⑤親しみの 表現		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ 0 0 + 0	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 2 0 4 0	
		↓ 5 0 0 0 0 0	↓ 1 1 1 0 0 0		[親しみ] 倫理的	[権力的] 底謙的
⑥好意		+ - + - + -	+ - + - + -	f	→ + - + -	
	m	↑ 0 0 0 0 0 0	↑ 0 0 0 0 0 0		↓ 0 0 0 0	
		↓ 0 3 0 0 0 0	↓ 0 1 0 1 4 0		[非好意的] 倫理的	[好意的] 非倫理的
⑦女性の 違和感		+ -	+ -	f	→ + -	
	m	↑ 0 0	↑ 0 0		↓ 0 0	
		↓ 0 3	↓ 2 2		[違和感なし] 倫理的	[違和感] 非倫理的
⑧(名ちゃん) と呼ぶ行為		否 背	否 背	f	→ + -	
	m	↑ 1 0	↑ 4 0		↓ 2 5	
		↓ 2 5	↓ 3 1		[肯定的] 倫理的	[否定的] 非倫理的
						[否定的] 非倫理的

## 6. 総合的考察と結論

### 6.1 呼ばれる女性にとっての「名ちゃん」

#### 6.1.1 男性のパワーとのかかわり

女性が男性から「名ちゃん」と呼ばれると、共感的、底謙的、失礼、軽卑的など、さまざまな意識で受け取る。その受け止め方は、女性自身の呼称観と相手のパワーが影響している。

対等な相手、親しい男性上司、親しくない相手でも擬似家族的な関係の場合は、相手のパワーは関与しないと考えられる。娘や妹のように「名ちゃん」と呼ばれると「ちゃん」が元来持つ“かわいい”、“子ども”という意味合いが前面化し、底謙的に呼ばれているという意識を持つことがある。

一方、親しくない上司から呼ばれると、女性自身の距離感より近づけられたと受け取り、相手のパワーが意識され違和感を持つことがある。この違和感について言及している2名の女性の語りからは、パワーと同時に性的な含みを受け取っていることがうかがえた。「ちゃん」が“女である”ことが立ち現れる呼称であることが、女は“性の対象

物”であり“半人前である”（中村, 1995: 59, 64）とするジェンダー・イデオロギーと結びつくと、「ちゃん」が、“女である”ゆえに“性的である”という含みと、“下である”ゆえに“半人前である”という含みとが重なり、軽卑的な側面が前面化すると考えられる。山根（1986: 214）は「『かわいい』ものは、自分よりも弱い。樂々と自分に取りこめる見込みがある」と述べており、“かわいい”ことが従属性と結びつき、「ちゃん」に軽卑的な意味合いを与えている可能性が示唆される。

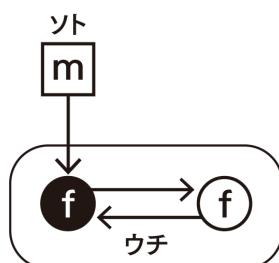
職場では姓で呼ばれることが一般的だが、男性が姓、女性が名で呼ばれることもある。このような呼称の使い分けが男性のパワーを表すものである以上（上野・メディアの中の性差別を考える会, 1996:46；斎藤, 2010:189；Spender, 1987:44），そこに相手との距離感の遠さが重なると〈名ちゃん〉は蔑称として機能し、女性は性的な違和感を持つことになると考えられる。

他方、男性のパワーや性的な含みを感じ取りながら、親しみも受け取るという矛盾した意識を持つケースも見られた。“遠い”相手から伝えられる〈名ちゃん〉が含み持つ“親しみ”が、軽卑的な違和感に繋がっているのではないだろうか。

### 6.1.2 女性同士の〈名ちゃん〉

女性同士では人間関係の距離感を反映し、ときには近づけ、ときには程よく遠ざけ、ときにはあいまいな距離感でも使用できる相対的で便利な呼称として機能する。つまり女性同士、〈名ちゃん〉をヨコの意識で使用しているといえる。それに対して、男性から呼ばれパワーが意識される場合は、上から下へのタテが意識されているといえよう。女性同士をウチ、男性をソトとするなら、ウチではヨコ、ソトからはタテの意識ということになる（図3）。女性は、ウチでの〈名ちゃん〉の用法があるために、ソトからタテ向きに使用されると、ウチでは感じなかった上下関係を強く感じる可能性がある。

図3 〈名ちゃん〉に対する女性のタテヨコの意識



### 6.2 呼ぶ男性にとっての〈名ちゃん〉

#### 6.2.1 自己と他者

自身が使用する〈名ちゃん〉の意味機能と、他人が使用するそれとでは、ほとんどの観点で逆向きの意識が見られ、自身は倫理的、他人は非倫理的に使用すると述べられた。自身は親しい相手に親しみを込めて近づけ、親しくない相手には敬意とともに距離を置く意識を持ち、近づきす

ぎると意識されると他の呼称を選択することも為される。一方で、他人は親しくない相手に近づき失礼であると述べている。親しくない下の女性に対する距離感について自他で差異があると捉えられ、その差異が倫理観に影響していると考えられる。

このような自己と他者で異なる意識を持つことは、「行為者とその行為を観察している者とでは原因帰属が異なる」とする「行為者－観察者バイアス」（森, 2015:101）などの認知バイアスである可能性がある。「他者の行動の原因を考える際」、外的要因より内的要因を重視する傾向を「人間がおかしがちな本質的で普遍的な帰属の誤りである」という意味で『基本的な帰属のエラー』という（森, 2015: 98）。認知バイアスと見られる男性の語りの例を挙げる。

#### ・行為者としての語りの例

（職場での下の女性に対する呼称について）

「何々ちゃん」。ただ長い時間を共有してゐる人には「ちゃん」になる。建前上、そこはやっぱり仕事の中やから、名字で呼ばなあかん。そういうときってあるやんか。仕事の中で。ビジネスのときっていう意味ね。ただただ、休みの時間があつたりするとかそういうとき。【鎌元】

#### ・観察者としての語りの例

（部下の女性に〈名ちゃん〉と呼びかける上司についての話題の中で）

その女の人に好意的やつたら、だから「ちゃん」って呼ぶんやろ？普通に会つてゐる時間を増やしたいから、ということや。ま、周りには明らかに見え見え。あの上司、気ありますよねって。【鎌元】

自己も誰かにとつては他者である以上、自己の呼称行為の認識がどうであれ他者からは自己の認識とは異なる認識で捉えられる可能性が常にある。〈名ちゃん〉が含み持つ意味合いを鑑みれば、呼ばれた女性からパワーとともに性的に軽んじられたと受け取られる蓋然性は高いといえる。

#### 6.2.2 職場での〈名ちゃん〉

調査参加者の男性5名全員が、職場では〈姓さん〉を使用すると語り、多くが職場での〈名ちゃん〉使用が社会倫理に反するとした。一方、本論の調査では職場の下位女性に対し〈名ちゃん〉を使用するケースが多く見られ、それぞれの呼称観が語られた。

2020年、厚生労働省によって労働施策総合推進法、男女雇用機会均等法及び育児・介護休業法が改正され、職場でのパワーハラスメント防止が事業主の義務となった。企業倫理として同僚や部下の女性を〈名ちゃん〉などの名で呼ばないように変化してきており、上位者の下位女性に対する呼称がセクシュアル・ハラスメントにあたる可能性が指摘されている（人事院, 2018）。職場で下位女性に〈名ちゃん〉と呼びかけることは、無意識のうちに性的な意味合いとパワーを相手に伝えている可能性が示唆される。

### 6.3 〈名ちゃん〉 使用における男女の非対称

#### 6.3.1 下向きの〈名ちゃん〉

下向きの〈名ちゃん〉における男女で異なる意識を整理する（表7）。

表7 男女で非対称な〈名ちゃん〉の意識

関係	m	f
〔親〕〔近〕	「敬意」がある	「敬意」の言及なし
〔親〕〔遠〕	「敬意」がある	言及なし
〔疎〕〔近〕	「失礼」なため呼ばない 「軽卑的」の言及なし 「権力的」の言及なし	「失礼」 「軽卑的」 「権力的」

親しい関係では、遠近の両方で男女の意識に非対称が見られる。男性は女性に丁寧さをもって近接的に呼びかけている意識だが、女性は敬意については意識を向けていない。また、男性は女性に丁寧さをもって遠隔的に呼びかけている意識だが、女性はそもそも遠隔的に呼ばれる経験を語っていない。

親しくない関係では、近接化の場合に男女の非対称性が顕著になる。男性の語りからは、親しくない女性に近づきすぎることが失礼にあたるとして〈名ちゃん〉使用を避けようとする意識が見られる。一方、女性の語りからは、近づけられるように呼ばれ失礼だと受け取っている様子が見られた。さらに、男性の語りには「軽卑的」「権力」という観点が現れないが、女性の語りからは、軽卑的・権力的に呼ばれ、相手のパワーとともに性的なニュアンスを受け取っている様子がうかがえた。

そういえば、イベントでリボンを切る錐を渡す係やったとき、リハーサルで舞台に上がってたら、男性の上司が選挙のときのメガホンみたいなやつ、あれで「ゆりちゃん」って言ったんですよ。〔えっ？〕ってなったんですけど、そのときはどうもできないじゃないですか？舞台からはけたときに、他の女の子から「ゆりちゃんって呼ばれてるん？」ってびっくりされたことありました。次にその上司が舞台に戻ってきたら、「小川さん」に戻ってたんで、誰かに注意されたんやと思います。【小川】

#### 6.3.2 親疎と上下関係

男性は〈名ちゃん〉使用について、親しい関係の相手に親しみを込めて呼びかける近呼称と、親しくない関係の相手に敬意を示し呼びかける遠呼称のヨコ方向に意識が向かれている。一方、上の女性への〈名ちゃん〉使用についてはタブーのような意識を語っており、タテ方向にも強い意識が向かれている。その意識の強さから、下の女性に对してのみ使用できる呼称であると認識していると考えられる。

（年上の女性に〈名ちゃん〉と呼びかけることについて）

年上にあんまそんなんせえへんやんな。言えへんわな。【上田】

僕は「ちゃん」は先輩にはないな。そこはやっぱり失礼や。僕は使わない、使わない。【鎌元】

年齢が上の人には基本的に敬う対象なので、敬う対象の人に「ちゃん」はないですね。【神谷】

女性は、女性同士や同等の男性との関係、あるいは上の男性との関係が擬似家族的である場合にも遠近のヨコ方向に意識が向けられている。親しくない上の男性から呼びかけられると、相手のパワーが強く意識されタテ方向に強い意識が向けられる。タテヨコいはずにおいても、親称、敬称、蔑称と多様に受け取っており、その意識の多様さから、上の男性から一方向的に呼ばれる側として、相手から示される関係性や意識を敏感に読み取らざるをえないと考えられる。

### 6.4 結論：〈名ちゃん〉とは何か

呼称は呼びかける側が認識する距離感を相手に伝える道具であるため、まず呼ぶ側が呼ぶことで距離感を提示する。本論で検討した男性が女性を呼ぶ〈名ちゃん〉という呼称における距離感の提示は、男性から女性への一方向である。呼ばれる側の女性は呼ばれてはじめて、呼ぶ側の男性が持つ距離感を認識することになる。この一方通行の距離の提示は、女性が違和感などのさまざまな感情や意識を持つことの基底となる可能性がある。

男性が呼称によって示す距離感が、女性が持つ距離感と異なれば、伝える意味と受け取る意味が異なり女性は違和感を持つ。男性は親しみや敬意の意味を〈名ちゃん〉に込めている一方で、他人の行為として〈名ちゃん〉が一方向的にパワーと性的な近接を伝える機能を含み持つ呼称であることを認識している。この男性の自他の認識の差も女性の違和感に影響している可能性がある。

さらに、〈名ちゃん〉が“相手のパワー”あるいは“性的である”という意味合いを含み持つことが、女性が呼ばれた違和感を言い出せないことにも影響している。Uchida (1992: 562) は、「男の権力によって、男は女の意味を『誤解』しても罰せられないが、男の行動を誤解した女を罰することができる」と述べている。男性の呼称行為を性的だとほのめかすことは、男性を誤解しているとみなされ、怒りを向けられることになる。この潜在的な恐れが、呼ばれた女性に男性のパワーを意識する要因となっていると考えられる。呼ぶ側の男性の倫理観にかかわらず、呼ばれる側の女性が示される意味に違和感を持つとき、その〈名ちゃん〉はパワーかつ性的な呼称として機能しているといえよう。

### 6.5 今後の課題

本論では男性が下の女性を呼ぶ〈名ちゃん〉について考察したが、職場以外での上下関係における使用、女性の自称、男性を呼ぶ用法、〈姓ちゃん〉、動物名・食べ物名につ

ける用法など多様な「ちゃん」の用法、また地域差については取り上げていない。そのため、「ちゃん」の全体像は明らかになっておらず、今後、さまざまな視点からの研究が求められる。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、多大なるご指導、ご助言、ご協力を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会 (1996) 『きっと変えられる性差別語：私たちのガイドライン』 三省堂
- 大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで』 名古屋大学出版会
- 太田裕子 (2019) 『はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ—研究計画から論文作成まで』 東京図書
- 神谷和音 (2021) 「接尾辞『ちゃん』の新しい意味用法—『いい子ちゃん』を中心にして」『愛知論叢』 110, pp. 127-146. 愛知大学大学院生協議会
- 金水敏 (2023) 「日本語の人称詞の問題点一人称詞と『品』『格』『性』『年』の観点から—」『日本語学』 42(3), pp. 100-110. 明治書院
- 小林美恵子 (1997) 「対称としての『[名字] さん』『[名字] 先生』」「女性のことば・職場編」 ひつじ書房
- 国語審議会 (1954) 『これからのお語』 [https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/01/tosin06/index.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/01/tosin06/index.html) (2023年11月28日最終閲覧)
- 国立国語研究所 (1982) 「企業の中の敬語」『国立国語研究所報告』 73. 三省堂
- 佐竹久仁子 (2005) 「〈女ことば/男ことば〉規範をめぐる 戦後の新聞の言説：国研『ことばに関する新聞記事見出しデータベース』から」『阪大日本語研究』 17, pp. 111-137. 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 斎藤正美 (2010) 「差別表現とガイドライン：差別をつくる／変えることば」中村桃子 (編) 『ジェンダーで学ぶ言語学』 世界思想社
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』 新曜社
- 白勢彩子 (2019) 「幼児期の音声生成」 麦谷綾子 (編著) 『子どもの音声』 コロナ社
- 杉本つとも (2005) 『語源海』 東京書籍
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』 大修館書店
- 滝浦真人 (2008) 「〈距離〉とポライトネス—“人を呼ぶこと”と“ものを呼ぶこと”の語用論」『ポライトネス入門』 4, pp. 75-96. 研究社
- 滝浦真人 (2013) 『日本語は親しさを伝えられるか』 岩波書店
- 辻村敏樹 (1970) 「現代の敬語」 森岡健二・永野賢・宮地裕 (編) 『講座 正しい日本語 コミュニケーション編』 6. 明治書院
- 中村桃子 (1995) 『ことばとフェミニズム』 勉草書房
- 成田徹男 (2013) 「接頭辞「お～」と接尾辞「～さん」をともなう語彙の意味用法の記述」『人間文化研究』 19, pp. 109-120. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科
- NHK放送文化研究所 (編) (2005) 『NHKことばのハンドブック 第2版』 NHK出版
- 入戸野宏 (2009) 「“かわいい”に関する行動科学的アプローチ」『広島大学大学院総合科学研究科紀要. I, 人間科学研究』 4, pp. 19-35. 広島大学大学院総合科学研究科
- 濱野綾 (2021) 「女性を呼ぶ『名ちゃん』は呼ばれる女性にどう影響するか—5人のケーススタディから—」放送大学卒業研究
- 人事院 (2018) 「セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメント」『平成30年度年次報告書』 <https://www.jinji.go.jp/hakusho/h30/1-2-02-2.html> (2023年10月1日最終閲覧)
- 穂積陳重 (1919) 『諱に関する疑』 (帝国学士院第一部論文集 邦文第二号) 帝国学士院
- 穂積陳重 [穂積重行校訂] (1992) 『忌み名の研究』 講談社
- 福田一雄 (2013) 『対人関係の言語学—ポライトネスからの眺め—』 開拓社
- 三島浩路 (2003) 「学級内における児童の呼ばれ方と児童相互の関係に関する研究」『教育心理学研究』 51(2), pp. 121-129. 日本教育心理学会
- 宮城実佳・黒木俊秀 (2018) 「呼称選択からみた大学生の友人関係と性格特性」『九州大学心理学研究』 19, pp. 9-14. 九州大学大学院人間環境学研究科
- 森津太子 (2015) 『改訂版 現代社会心理学特論』 放送大学教育振興会
- 山下洋子 (2017) 「『ちゃん/君/さん』動物が『死する/亡くなる』について～『日本語のゆれに関する調査』の報告～」 NHK放送文化研究所 (編) 『放送研究と調査』 67(11), pp. 100-107. NHK出版
- やまだようこ (2006) 「非構造化インタビューにおける問う技法-質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス」『質的心理学研究』 5(1), pp. 194-216. 日本質的心理学会
- 山根一眞 (1986) 『変体少女文字の研究—文字の向うに少女が見える—』 講談社
- 劉寧 (2016) 「日本人大学生の呼称使用について—上下・親疎・性差が及ぼす影響—」『東北大学言語学論集』 24, pp. 129-140. 東北大学言語学研究会
- 劉寧 (2017) 「職場における呼称使用に関する日中対照研

究』『東北大学言語学論集』26, pp. 61-76. 東北大学言語学研究会

和田実・伊藤晴香 (2018) 「同性からの呼ばれ方と性別による呼ぶ人と呼ばれることに対する感情、および関係親密さ認知との関連」『人間学研究』16, pp. 29-44. 名城大学人間学部

Holstein, James A. & Gubrium, Jaber F. (1995) *The Active Interview*. SAGE Publications, Inc. [邦訳 ジェイムズ・ホル斯坦, ジェイバー・グブリアム／山田富秋, 兼子一, 倉石一郎, 矢原隆行 (訳) 『アクティヴ・インタビュー—相互行為としての社会調査』(2004) セリカ書房]

Spender, Dale (1985) *Man made language*. Routledge & Kegan Paul. [邦訳 D.スペイダー／れいのるず=秋葉かつえ (訳) (1987) 『ことばは男が支配する：言語と性差』勁草書房]

Uchida, Aki (1992) When “difference” is “dominance”: A critique of the “anti-power-based” cultural approach to sex differences. *Language in Society* 21(4), pp. 547-568. Cambridge University Press.